

高知県大月町

竜ヶ迫遺跡  
ムクリ山遺跡



1994・3

高知県大月町教育委員会

## 発刊にあたり

平成4年8月に町単独事業で、高知県埋蔵文化財センターの協力を得て発掘調査が実施されました「竜ヶ迫遺跡」及び「ムクリ山遺跡」の概要がこのたび発掘調査報告書として発刊することとなりました。

竜ヶ迫遺跡は、本町で初めて発見された旧石器時代の遺跡であり、高知県においても貴重な遺跡であります。今回はナイフ形石器の採集地点における確認調査を実施しました。調査期間が2日間という短期間でしたが、遺物も数点出土しており今後の調査によっては、瀬戸内文化とのつながりが解明されるものと期待しております。

一方ムクリ山遺跡については、昭和48年（1973年）の発掘調査によって弥生時代の高地性集落であることがわかりました。今回の調査では前回と同様の遺物が200点程度出土し、この遺跡面積が広範囲にわたっていることも判明しました。

両遺跡とも本町にとって、私達の祖先の営みを知るうえで大変重要な文化遺産であります。今後において不明な部分が解明されることにより、現在の私達に夢とロマンを与えてくれると共に本町が目指している「文化の薫るふるさとづくり」や「心豊かな人づくり」の一翼を担うものと確信しております。

最後に発掘調査と報告書作成にあたって執筆いただきました高知県埋蔵センターの森田尚宏先生、山本哲也先生、前田光雄先生並びに遺跡の発見者であり地権者である竹田源春氏、作業に従事されました地元のみなさまに対し心から感謝申し上げます。

本書が考古学を研究するうえで参考資料となり、埋蔵文化財に対する住民の認識が深まれば幸いです。

平成6年3月3日

大月町教育長 新谷速雄

## 例　　言

## 目　　次

1. 本書は高知県幡多郡大月町竜ヶ迫1516に所在する「竜ヶ迫遺跡」及び大月町ムクリ山1913-1に所在する「ムクリ山遺跡」の2ヶ所の遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡保存状態把握のため、大月町教育委員会が町負担で発掘調査を実施した。
3. 調査は大月町教育委員会が主体となり、発掘調査は「竜ヶ迫遺跡」を森田尚宏・山本哲也（高知県埋蔵文化財センター）が、「ムクリ山遺跡」を前田光雄（同）がそれぞれ担当した。事務全般等は浜田逸男・岡田剛典（大月町教育委員会）が行った。
4. 発掘調査は「竜ヶ迫遺跡」は平成4年8月11、12日の2日間、「ムクリ山遺跡」を平成4年8月3日～同8月14日まで実施した。
5. 本書の編集は大月町教育委員会が行い、執筆は「竜ヶ迫遺跡」を森田、「ムクリ山遺跡」を前田が担当した。
6. 発掘調査から報告書作成に至る過程で次の方々及び諸機関に助言・協力を賜った。特に「ムクリ山遺跡」の地権者であり、また「竜ヶ迫遺跡」のナイフ形石器を発見された竹田藤春氏には心よりお礼申し上げたい。木村剛朗、近森泰子、松村信博、高知県埋蔵文化財センター、高知県教育委員会

発刊にあたり

### 例　　言

### 目　　次

I	調査に至る経過	1
II	竜ヶ迫遺跡	2
1.	竜ヶ迫遺跡の調査について	
2.	遺物について	
3.	まとめ	
III	ムクリ山遺跡	13
1.	ムクリ山遺跡の所在地	
2.	ムクリ山遺跡について	
3.	調査について	
4.	遺物について	
5.	まとめ	



発掘参加者

## I 調査に至る経過

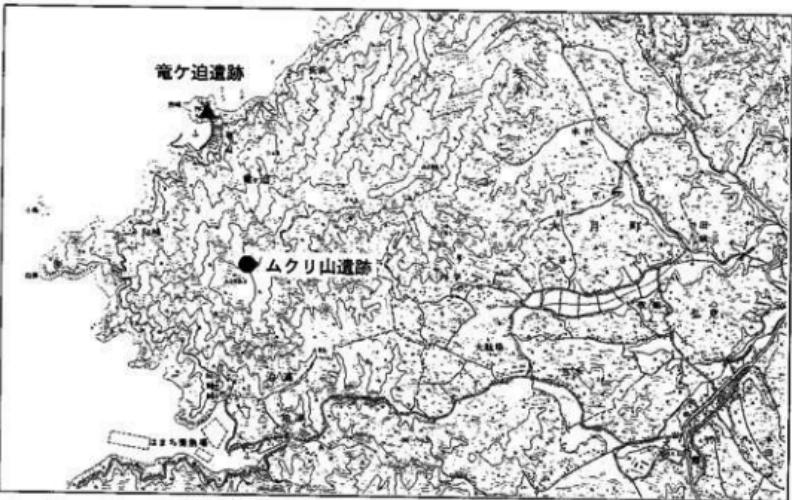
ムクリ山遺跡は昭和48年（1973）に岡本健児・廣田典夫により、科研の高地性集落調査の一環として、調査が実施されている。その成果は岡本健児により「高知県ムクリ山遺跡」（『高地性集落の研究』1979 学生社）として、発表され注目された。その後、久しくムクリ山遺跡は調査されることがなかった。大月町では平成元年（1990）に海岸沿いに立地する尻目遺跡の町教育委員会により学術調査が実施され、縄文時代後期に属し、九州との繋がりが認められ注目された。その

2年後、再度町主体で郷土史の研究のため、ムクリ山遺跡の学術調査を実施することになった。

ムクリ山遺跡の発見者でもあり、地権者でもある竜ヶ迫在住の竹田源春氏との打ち合わせの際、竹田氏が平成元年（1990）の3月に竜ヶ迫天満宮の参道でナイフ形石器を採集され、保管されていたことが判明した。竜ヶ迫遺跡は昭和63年（1988）の『高知県遺跡詳細分布調査概報－幡多ブロッカー』には縄文時代の遺跡として登載されている。竜ヶ迫遺跡は縄文時代ばかりではなく、旧石器時代をも含む遺跡としては注目を浴びることになる。大月町では初めての旧石器時代の遺跡でもあり、また高知県に於いても数少ない旧石器時代の遺跡であることから、ムクリ山遺跡と併せて発掘調査を実施することになった。



第1図 大月町位置図



第2図 竜ヶ迫・ムクリ山遺跡位置図

## II 竜ヶ迫遺跡

### 1. 竜ヶ迫遺跡の調査について

竜ヶ迫遺跡の調査は、ナイフ形石器が採集されたことを受けて、今回のムクリ山遺跡の調査と並行して採集地点の確認調査として行われることになった。

竜ヶ迫遺跡は、大月町の西北岸、宿毛湾に面した海岸線に位置している。大月町の海岸線は急峻な斜面が海へと落ち込む断崖が続いており、その間に小さな入り江が点在している。遺跡の立地は、竜ヶ迫の集落が所在する海岸から突出する標高約47mの独立丘陵であり、周囲は10~40mの断崖絶壁に囲まれている。独立丘陵の東南部は、幅約110mの鞍部でつながれており、標高は約20mである。丘陵の頂部は削平され、天満宮が建てられており、鞍部からの参道が続いている。竜ヶ迫の集落は、鞍部から南にかけて開かれており、集落の前面及び鞍部の北側には狭いながらも海浜が見られる。ナイフ形石器は地元の竹田源春氏により天満宮の参道部分で採集されている。参道の最上部は石段となっており、下部は30~40°の傾斜を持つかなり急峻な斜面である。採集地点は石段の下方約5mの参道斜面上であり、発見の状況からみれば一部地中に埋まっていたようである。

高知県における旧石器時代の遺跡は、現在のところ他県に比して極めて数少ないが、その所在地は幡多地域に集中してみられる。宿毛湾岸では、北岸の宿毛市にナイフ形石器を出土した宇須々木遺跡が竜ヶ迫遺跡と相対するように位置している。他の遺跡としては、四万十川の河口北部の海岸段丘上に双海中駄場・本駄場遺跡が、同じく四万十川の上流域には橋原町の影野地遺跡、中流域には大正町の八足遺跡等が知られている。また、高知県中央部の遺跡としては、古墳の床面からではあるが高知市の高間原古墳からチャート製の細石刃石核が出土している。

竜ヶ迫遺跡の確認調査は、平成4年8月11~12日の2日間にわたって行われた。調査の目的は、ナイフ形石器の採集地点の確認と、地面中から出土していることからナイフ形石器の包含されていた層序の判別であり、周辺の地形及び遺物が包含されているとすればその広がり等から遺跡の性格、範囲を把握しようとするものであった。

遺跡周辺の地形をみれば、丘陵頂部は70×20mの精円形であり、中心部は天満宮の宮社建築のために1mほど削平されている。天満宮から約8m下方には石段が造られており、参道へと続いている。参道の北側はやや緩斜面であるが、南側は斜面を削平し、平場を造成しており、カット面には地山が見られる。さらに下方には小学校の跡地が残されており、周辺は畠地となっている。ナイフ形石器の採集地点は、通常の遺跡の立地からみれば極めて急峻な斜面であり、調査前には頂部の天満宮付近からの流れ込みではないかと考えられた。

調査は現地において採集地点を確定した後、この地点にトレント（TR 2）を設定し、開始された。トレントはTR 1~4の4ヶ所であり、TR 1は参道の北斜面、TR 2は石段の下端から3m下方の参道、TR 3はさらに下方4mの参道西側、TR 4は参道西側の平場である。TR 2は当初、参道の両端2ヶ所にトレントを設定し調査を進めたが、遺物が出土したことから拡張し、変形のト



第3図 電ヶ迫遺跡位置図 (S=1/4,000) ★—ナイフ形石器3の採集地点



電ヶ迫遺跡遠景（ムクリ山より望む）

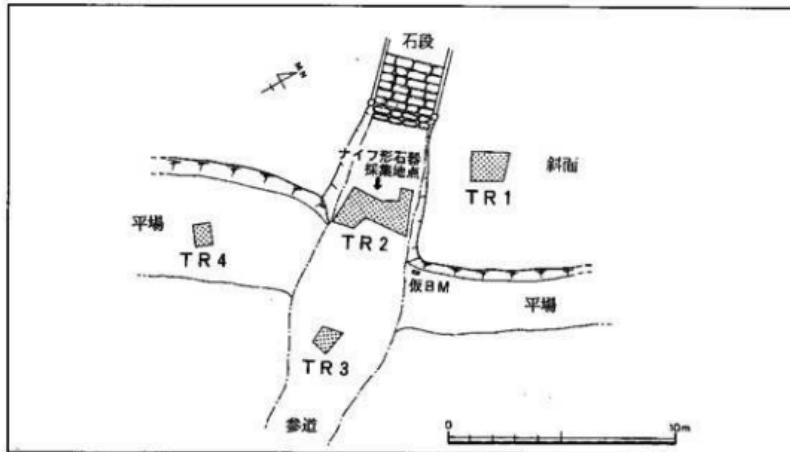
レンチとなつた。次に各トレンチの調査状況及び層序等について述べる。

#### (1) TR 1

TR 1は $1.5 \times 1.3\text{m}$ のトレンチであり、参道から北へ $2\text{m}$ の位置である。現況は羊歯が密生しており、地表面が見えない状況であった。調査の結果、地表下約 $1.2\text{m}$ で地山となり、遺物は発見されなかつた。層序は、第1層表土、第2層茶褐色粘質土、第3層黄橙色粘質土、第4層淡赤褐色地山であり、斜面に添つた斜めの堆積をみせている。第1層は $30\text{cm}$ 、第2層も $30\text{cm}$ と厚く、第3層は南面が厚く約 $30\text{cm}$ 、北面は約 $10\text{cm}$ と薄くなつており、赤ホヤ火山灰が土壤化した2次堆積土と考えられる。このような第3層の堆積状態からみれば、斜面とは云え浅い谷状の地形が存在していたようであり、他のトレンチの堆積状況に比べ大きな違いがみられる。トレンチの調査面積は $2\text{m}^2$ であった。

#### (2) TR 2

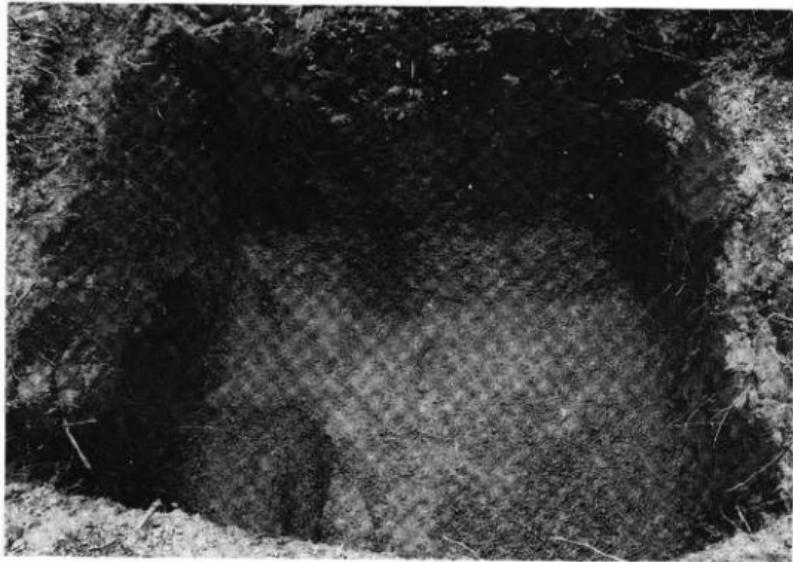
TR 2は、当初石段下方の参道両端に設定された $0.5 \times 2\text{m}$ と $1 \times 2\text{m}$ の2ヶ所のトレンチであつたが、剥片等が出土したため両トレンチをつなぐような形で拡張した結果、参道を横断する変形のトレンチとなつた。層序は第1層表土、第2層茶橙色粘質土、第3層灰褐色粘質土、第4層褐色地山である。表土は中央部が参道であったために流失しており、両側に存在するのみである。参道中央部に露出している第2層茶橙色粘質土は、赤ホヤ火山灰の混入土であり、よく締まつてゐる。第3層灰褐色粘質土から遺物は出土しておらず、トレンチのやや南よりを中心としている。出土遺物はナイフ形石器1点、石核1点、縦長剥片2点、横長剥片2点であった。第3層も第2層同様堅く締まっており、遺物の出土状態からすれば流れ込みとみるよりも包含層と考えられそうである。トレンチの調査面積は $4.2\text{m}^2$ であった。



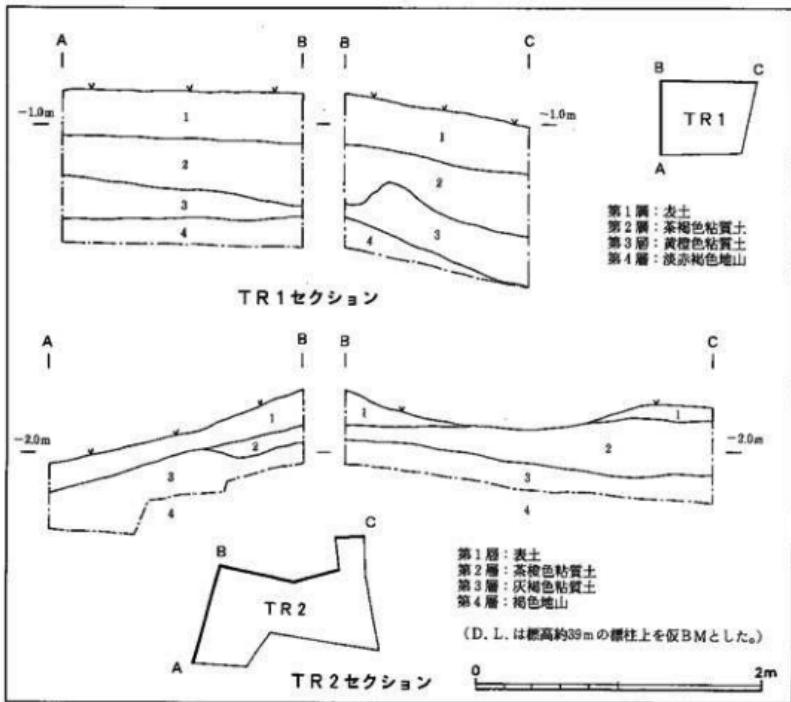
第4図 調査区設定図



調査区近景



TR 1



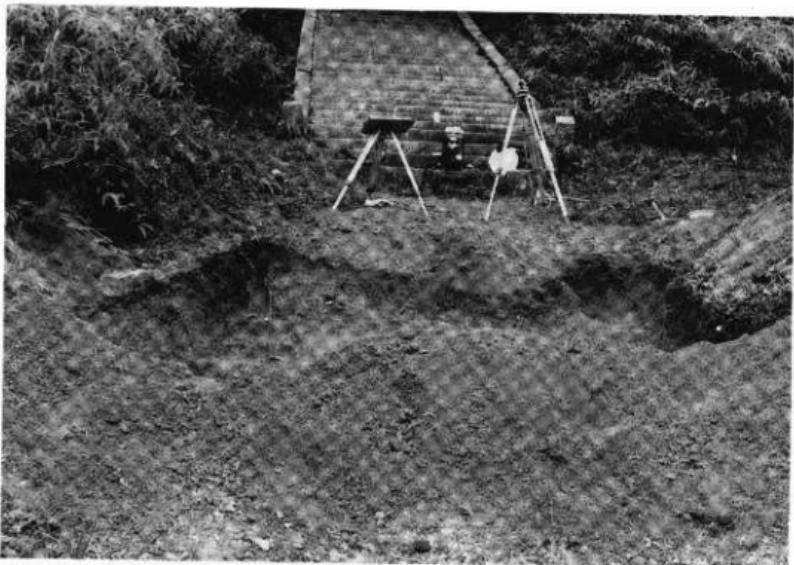
第5図 TR 1・2セクション図

### (3) TR 3

TR 3は、TR 2の下方約4m、参道の西端部に設定された $0.8 \times 1.2\text{m}$ のトレンチである。層序はTR 2と同様であり、第1層表土、第2層茶褐色粘質土、第3層灰褐色粘質土、第4層褐色地山である。しかしながら参道であるため土層の流失が激しく、第2層は5cm前後と薄く、第3層も一部にしかみられない。遺物は出土しなかったが、第2・3層中には風化した頁岩礫片が若干みられた。トレンチの調査面積は $0.8\text{m}^2$ であった。

### (4) TR 4

TR 4は、参道南側の $8 \times 12\text{m}$ の平場に設定したトレンチである。平場は斜面を削平し造成されたものであり、斜面断面には20~30cmの礫片を多量に含む風化した地山がみられた。トレンチの層序は、第1層表土、第2層地山であり、斜面断面と同様に地山に礫片が含まれていた。遺物の出土はなく、トレンチの調査面積は $0.7\text{m}^2$ であった。



TR 2



TR 2 遗物出土状况

## 2. 遺物について

今回の確認調査で遺物が出土したのはTR2のみであった。出土した遺物はナイフ形石器1点、縦長剥片2点、横長剥片2点、石核1点の計6点である。他に頁岩等の鱗片がみられたが、すべて自然鱗であった。また、調査の契機になったナイフ形石器1点と、調査後近くの畠地で木村剛朗氏により採集されたナイフ形石器1点が存在する。以下、各遺物について述べる。

### ナイフ形石器（第6図1～3）

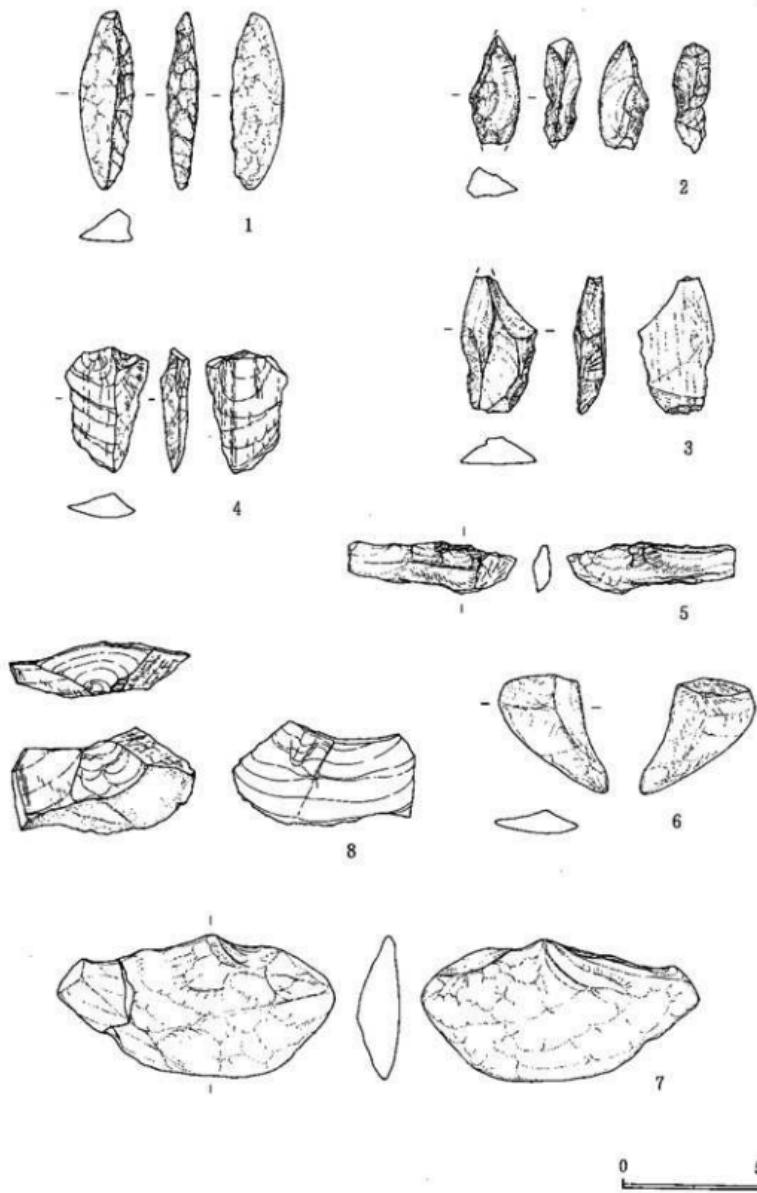
1は竹田氏により採集された完形のナイフ形石器であり、全長6.2cm、全幅1.9cm、全厚1.1cm、重量11.9gである。使用される石材はサスカイトとみられるが、風化が激しく剥離面も鈍くなっている。横長剥片を素材としており、断面は三角形をなす。背部のプランティングは腹面からを中心として、両端部は背面から全面に行われており、打面を全てカットしている。

2はTR2から出土したナイフ形石器であり、現存長3.9cm、全幅1.8cm、全厚1.1cm、重量4.9gである。両端部には新しい欠損がみられる。石材は黒色頁岩であり、芯の部分は黒色を呈しているが風化は内部まで進行しており、表面は淡黄褐色を呈している。山形の打面頂部からは平面、腹面の両面に少剥離が行われており、腹面側の基部にはさらに剥離が一部みられる。背部には、背面と腹面の両面からの荒いプランティングが中央部を中心に施されており、刃部側は基部に小さく調整剥離がみられる。

3は調査地点の南東約80mの鞍部を越えた山側の畠地（第3図 ★の位置）から木村氏により採集されたナイフ形石器である。先端は一部欠損しており、現存長3.9cm、全幅1.8cm、全厚1.1cm、重量4.9gである。形態的には、基部調整により右側辺に斜刃を作り出しており、1・2のナイフ形石器との違いがみられる。素材は不定形の横長剥片を使用しており、石材は硬砂岩と考えられる。基部は背面からの剥離によりカットされており、両側面の下半部は腹面からの荒いプランティングが施されている。左側面は大きめの剥離一回により、右側面は3回程の剥離によるプランティングであり、刃部にも2ヶ所の刃こぼれ状の小剥離が観察される。

### 縦長剥片（第6図4・6）

4・6ともにTR2から出土した縦長剥片である。4は全長4.4cm、全幅3.0cm、全厚1.0cm、重量9.4gであり、石材は頁岩と考えられる。打面と腹面のなす角度は60°と大きく、やや不定形であるが、背面に稜線の通った剥片であり、断面は三角形である。背面に残された剥離面は3面であるが、左側の剥離が最も大きく、当剥片の打面と同打面からの先行する剥離面である。右側の上部にはやはり同打面からの小剥離面が存在し、他面は左上方からの先行する剥離面である。打面はやや幅広く、打面調整はみられずに剥離面を打面としている。6は全長5.2cm、全幅2.9cm、全厚0.8cm、重量7.7gであり、表面は風化により淡黄褐色を呈するが、石材はやはり頁岩とみられる。右側にカーブする剥片であり、背面には稜線が通っている。腹面はやや丸味を帯び、断面は三角形である。背面の剥離は風化のため不明瞭であるが3面とみられる。打面は調整のない幅広の剥離面であり、



第6図 遺物実測図

同打面からの剥離ではなく、背面の剥離はいづれも両側面と左上方からの先行する剥離面である。

#### 横長剥片（第6図5・7）

5・7もTR2からの出土である。5は全長5.9cm、全幅1.9cm、全厚0.6cm、重量7.0g、7は全長9.8cm、全幅5.1cm、全厚1.5cm、重量82.3gである。5・7ともに不整形の横長剥片であり、石材は頁岩とみられる。5の背面には同打面からの2面の小剥離がみられるが、他の剥離は不明瞭である。7は風化が激しく表面は暗黄灰色を呈しており、剥離面は鈍くなっている。背面には不明瞭ながら打面方向からの剥離が大小2面みられるが、下半部の剥離方向は不明である。

#### 横長剥片石核（第6図8）

8はTR2から出土した横長剥片石核である。石材は頁岩であり、全長6.4cm、全幅3.8cm、全厚2.0cm、重量48.1gとやや小形である。素材となる剥片は、肉厚のやや幅広の剥片であり、背面下縁辺側に薄皮面を残している。また、右側には石理による割裂面がみられ、中央部には当剥片と同方向からの先行する剥離面、左側にはそれ以前の左方向からの剥離面が残されている。剥片の剥離は、背面中央部の剥離面を打面とし横長剥片を剥離しており、一面のみの剥離である。打面調整は行われず、剥離面を直接打面としており、剥離の結果素材となる剥片の上部をカットした状態である。形状からみれば剥離された横長剥片は、かなり分厚く、断面三角形の寸詰りの剥片と考えられる。剥離面はシャープであり、ほとんど風化はみられない。

### 3.まとめ

今回の竜ヶ迫遺跡の確認調査は極めて短期間であり、調査面積も限られているところから、果たして表採されたナイフ形石器に関わる新たな知見を得ることができるかどうかは不明であった。しかしながら、ナイフ形石器が採集された位置のTR2からは、さらに1点のナイフ形石器とともに剥片、石核の出土を確認することができ、高知県内における旧石器時代の遺跡としては唯一、調査によりその存在が明らかとなった遺跡と云える。

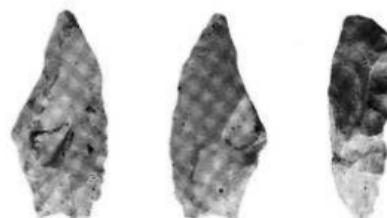
調査の結果、TR2の第3層灰褐色粘質土から数少ないが、ある程度まとまってナイフ形石器等を出土したことにより、やはり流れ込みによる2次堆積とみるよりも包含層の存在を考えるのでないかと思われるが、現地の急傾斜である地形やTR1の土層堆積状況等を併せ考えてみると、調査面積が少ないとても、確実な包含層とその広がりを把握したとは云い難い。

出土した遺物からみれば、石核と剥片、さらにナイフ形石器においてもその風化的度合いに著しい違いがみられ、この点では同一期の所産とは考えにくく、時期差を考慮しなければならないのではないかだろうか。また、表採されたナイフ形石器は、サヌカイト製の定型的な横長剥片を素材とする良好なナイフ形石器であり、出土資料である頁岩製のナイフ形石器との間にもタイプの違いをみることができる。さらに、後日近隣の畠地で採集されたナイフ形石器は、不定形の剥片を素材とし、使用される石材にも違いをみることができ、先述の2点ともまた違ったタイプである。

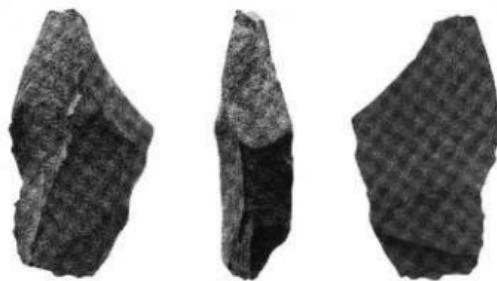
さて、以上の結果からすれば、資料は少ないが各々のナイフ形石器にタイプの違いをみることが



ナイフ形石器 No. 1



ナイフ形石器 No. 2



ナイフ形石器 No. 3

できる。これをやはり時期差として考えるならば、最も古く位置付けられるのはサヌカイト製のナイフ形石器であり、瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器の時期に結び付くものである。出土資料のナイフ形石器は石材を頁岩としながらも、素材となる横長剥片はネガ、ポジの両面を持ち、連続的剥離を窺わせる。この点では、先のナイフ形石器と同様であるが、形態とやや荒いプランティング、また基部調整等からは後出的であると云えよう。3点目のナイフ形石器は、形態及び素材となる剥片、石材からすれば、横長剥片素材の先の2点とは明らかに違い、さらに後出的なナイフ形石器の時期の所産であると考えられる。

小規模な調査であり、この結果を持って竜ヶ迫遺跡の評価とするには十分ではないが、天満宮参道地点と山側の畠地の2地点のナイフ形石器には時期差が認められ、先の2点のナイフ形石器における違いも、他の石核、剥片との風化の度合いも考慮すればやはりある程度の時期差を考えることができる。当遺跡は小規模な遺跡とみられるが、遺物からすれば2時期以上に渡る遺跡であり、今後数少ない高知県の旧石器時代研究を進めるうえでは重要な資料を得ることができた。

### III ムクリ山遺跡

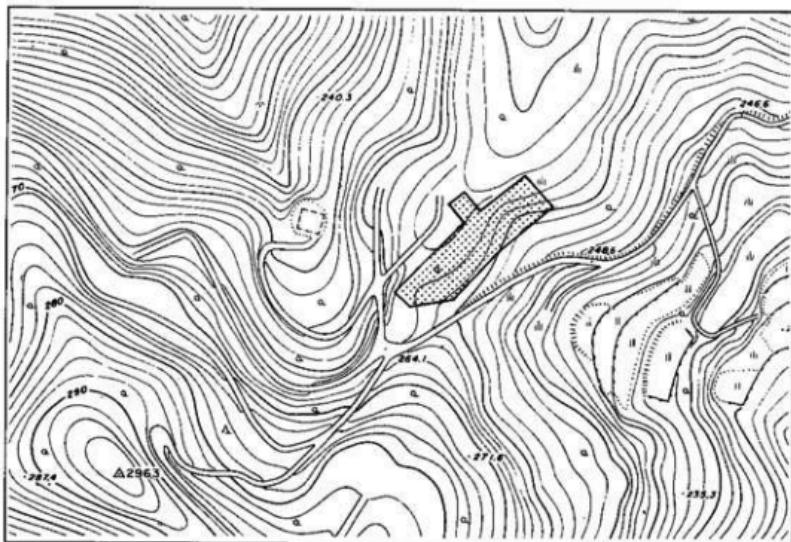
#### 1. ムクリ山遺跡の所在地

高知県幡多郡大月町は高知県の西部の豊後水道に面しており、海岸部は入り江が発達している。町の中心地は弘見と呼ばれ、海岸部から離れ、やや開けた平野部に位置する。ムクリ山遺跡は大月町の北東部の標高約292mのムクリ山の山頂より北側に下った標高260mの鞍部に所在する。眼下には竜ヶ迫遺跡が所在する竜ヶ迫集落、南宇和郡のリアス式海岸まで臨むことができる。

遺跡は太平洋戦争敗戦後に農家の入植に際して発見された。昭和48年に調査を実施した結果、弥生時代中期末の高地性集落であることが判明し、四国内では最南西端に立地する高地性集落である。また、弥生時代以外には縄文時代前期の轟式及び姫島産黒曜石の石器等が出土している。

#### 2. ムクリ山遺跡について

昭和48年の文部省科学研究費総合研究『弥生系高地性集落址の研究』により発掘調査が実施されたのが唯一であり、その成果は『高知県ムクリ山遺跡』(『高地性集落の研究』1979 国本)として発表されている。検出された遺構は余り類を見ない「平地住居址」1棟とそれに付帯すると考えられる排水溝が検出されたとしている。住居跡からは高知県西部に分布する神西式と呼ばれる畿内第



第7図 ムクリ山遺跡調査位置図

IV様式並行の土器群が比較的纏まって出土している。神西式以前の土器も出土しており、畿内第三様式新段階に出現し、第IV様式に消滅したと考えられている。土器以外の遺物としては、鐵鎌、大型石鎌は出土していないものの、遺跡の性格としては「軍事的・防衛的な面を考えたのであるが、とくに現地にたってその景観を見る時、宿毛湾およびその背景にある弥生系低地集落を守るために見張台的役割を強く演じたと観るべきであろう」としている。また瀬戸内海の軍事的機能の「紫雲出型」に相当するとしている（岡本 1977）。

高地性集落の総まとめをした小野忠熙は、高地性集落の機能について「I. 防衛集落説 II. 烟作集落説 III. 祭祀集落説 IV. 海上支配者の集落説 V. 異民族の集落説 VI. 低地農村の分村説」（小野 1986）に大きく区分でき、その中でも I の防衛集落説については「①見張台説、②防砦説、③防禦施設を備えた農耕村落説、④狩猟村落説、⑤兼業村落説、⑥烟作村落説」に細区分し、ムクリ山遺跡を①の見張台の機能を持つ軍事的防衛集落と位置付けている（小野 1984）。

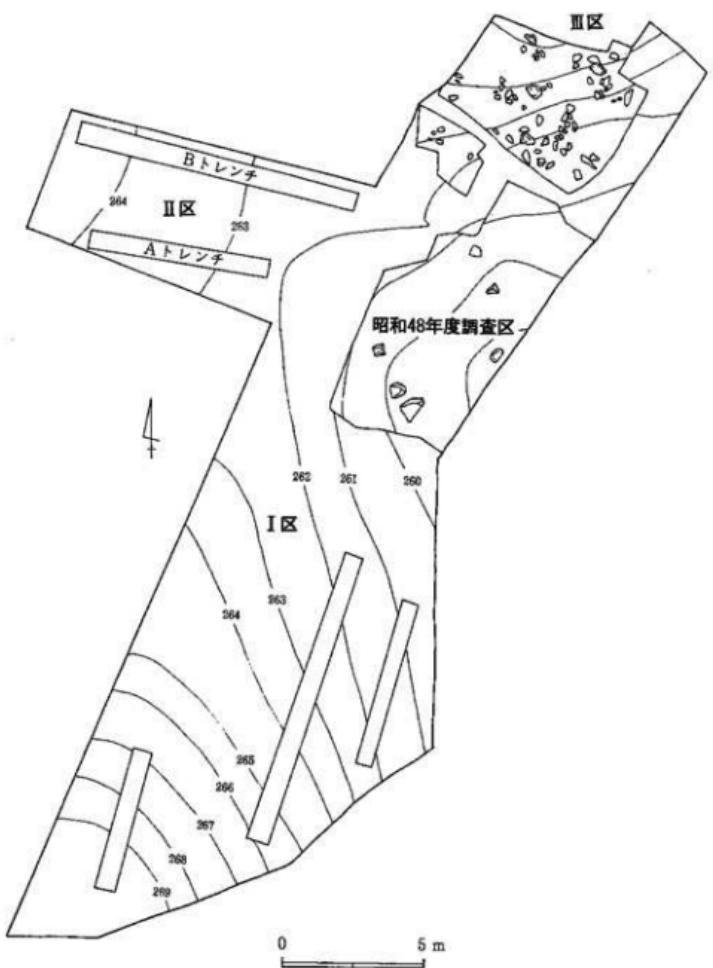
### 3. 調査について

#### 日誌抄

平成4年8月3日（月）、大月町役場に集合。器材を公用車2台に積み、AM10:00に出発。ムクリ山までの山道を上がる。途中、悪路で車を押すことも。30分程でムクリ山に到着。発掘参加者の高校生達に「ムクリ山遺跡」、作業の点順を説明。ベースキャンプ・トイレの設営。地権者の竹



ムクリ山遺跡遠景



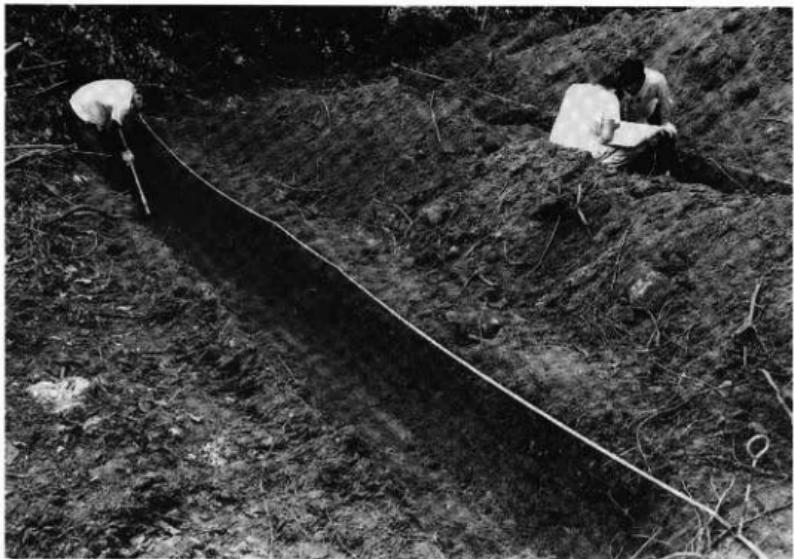
第8図 調査区全体図

田添春氏と調査区設定に際し打ち合わせ。昭和48年度の調査地点を中心に樹木の伐採。PM 4:30 に作業中止、下山。8月4日(火)、台風9号接近、作業中止。8月5日(水)、昭和48年度調査部分の再発掘。19年前に埋め戻した際のビニールシートが出土。さすがにぼろぼろになっている。さらに南側方向へ樹木の伐採。8月6日(木)、昭和48年度の調査部分の再発掘、樹木伐採を継続。弥生土器出土するも大部分が細片。8月7日(金)、A・Bトレンチの人力・重機により掘削。土は残存するものの、遺物・遺構は検出されず。またしても台風10号接近、備える。8月8日(土)、台風10号接近。午前中に鹿児島に上陸。作業中止。8月10日(月)、台風の後始末。数本の杉が倒れる。I区の人力・重機による表土除去。さらに北側部分のIII区の拡張。礫が纏まって出土。松田、山下の県教委の埋文班の両名が突然来跡。パジェロで山道を迷子になりながらも上がってくる。8月11日(火)、I区にトレンチ3ヶ所設定、掘削。表土下5~10cmで基盤層となる。遺構・遺物はなし。III区の拡張調査。竜ヶ迫遺跡の担当の森田・山本の両名が来跡。竜ヶ迫遺跡も発掘開始。8月12日(水)、III区の掘り下げ。礫が集中するものの、遺構か自然かは判然とせず。測量のための杭打ち。8月13日(木)、I区の全体図作成。埋文センターの近森、来跡。III区の掘り下げ継続。8月14日(金)、埋文センターの松村、来跡。II・III区の全体図作成。全景写真等の撮影。昭和48年度調査部分には再びブルーシートを被せて埋め戻し。器材搬出。実働9日間の調査を終える。

今回の調査は昭和48年度の調査と同様に尾根筋の東側傾斜地部分の調査を実施した。調査対象区の南側部分のI区を全体的に樹木の伐採を行い、トレンチを3ヶ所設定した。遺物包含層はなく、



I区 調査風景



II区 トレンチ調査風景



III区・昭和48年度調査区

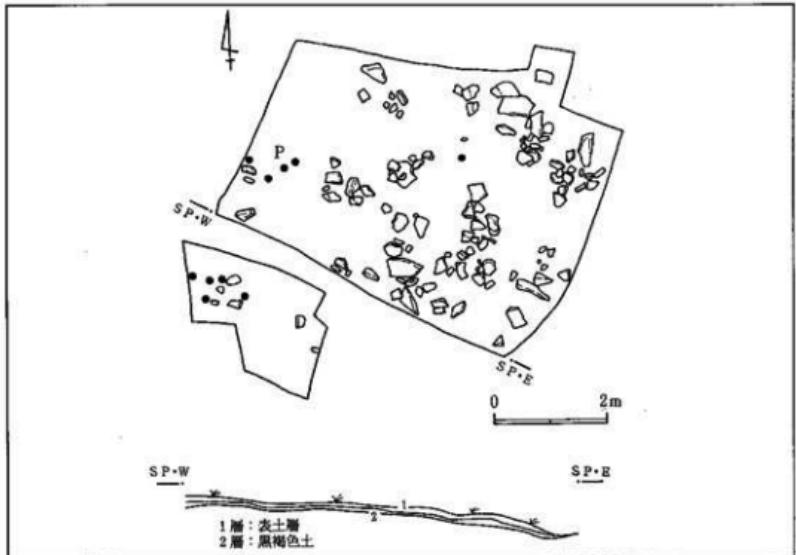
表土下には基盤層が露出しており、表土層中に僅かに弥生中期末に含まれる土器細片が採集されたのみであった。北側部分のⅢ区では、拳大から人頭大の礫が比較的集中しており、何らかの遺構ではないかと期待が持たれたものの、検出状態では配列等の規則性は認め難く、また柱穴・焼土跡等も検出されずじまいであり、遺構として把握するのは困難であった。また弥生中期末の土器片が他の調査区に較べ比較的纏まって出土したもの、やはり細片が多く、礫群と関連付けることは困難であった。

Ⅱ区西側部分のA・Bトレーニチは尾根頂上部になり比較的平坦面を形成しており、土壤の残り具合は他の調査部分よりも良いものの、巨木のためさらに調査の拡幅はできず、トレーニチを2ヶ所設定したにとどまった。

#### 4. 遺物について

今回の調査で出土した遺物は弥生時代中期に含まれる土器片が約200点程出土している。その中で実測図を掲載できたものは、第10図の21点である。また石器は磨石2点と黒曜石のチップが数点出土したにとどまる。

第10図1～21は全て弥生中期末に含まれ、大部分が壺か甕になる可能性が強い。1は口径12.5cmを測り、やや開き気味に立ち上がる。頸部にハケ調整が認められる。胎土は精良で色調は内外面共に暗橙色を呈する。2は口縁部に粘土帯を貼付し、肥厚させる。口径は13.7cmを測る。内外面共に



第9図 Ⅲ区遺物出土状況



III区 遗物出土状况



III区 遗物出土状况

ナデのみで、胎土は精良である。色調は内外面共に橙色を呈する。3も口縁部に粘土帯を貼付したもので器肉は厚い。口径はやや広く復元直は16.2cmを測る。胎土は精良で色調は内外面共に褐色を呈する。4・5も口縁部に粘土帯を貼付したもので、さらに口唇部に列点状刺突を施す。胎土は共に精良で色調は同様に褐色を呈する。

6・7・8は頸部破片で頸部に列点状刺突を施したものである。6はハケ調整が認められる。胎土は3点共に精良で色調は褐色を呈する。

9・10・11も壺の口縁部破片と考えられ、肥厚は認められないものである。9・10は器肉が薄く口唇部にやや丸味を持つ。11は器肉が厚く口唇部が平坦である。胎土は3点共に精良で、暗褐色を呈する。

12は肩部破片で外面は粗いハケ調整。微砂粒を微量含み色調は内外面共に赤褐色を呈する。13は頸部破片で粘土帯の貼付が認められ、また内面はハケである。胎土は精良で橙色を呈する。

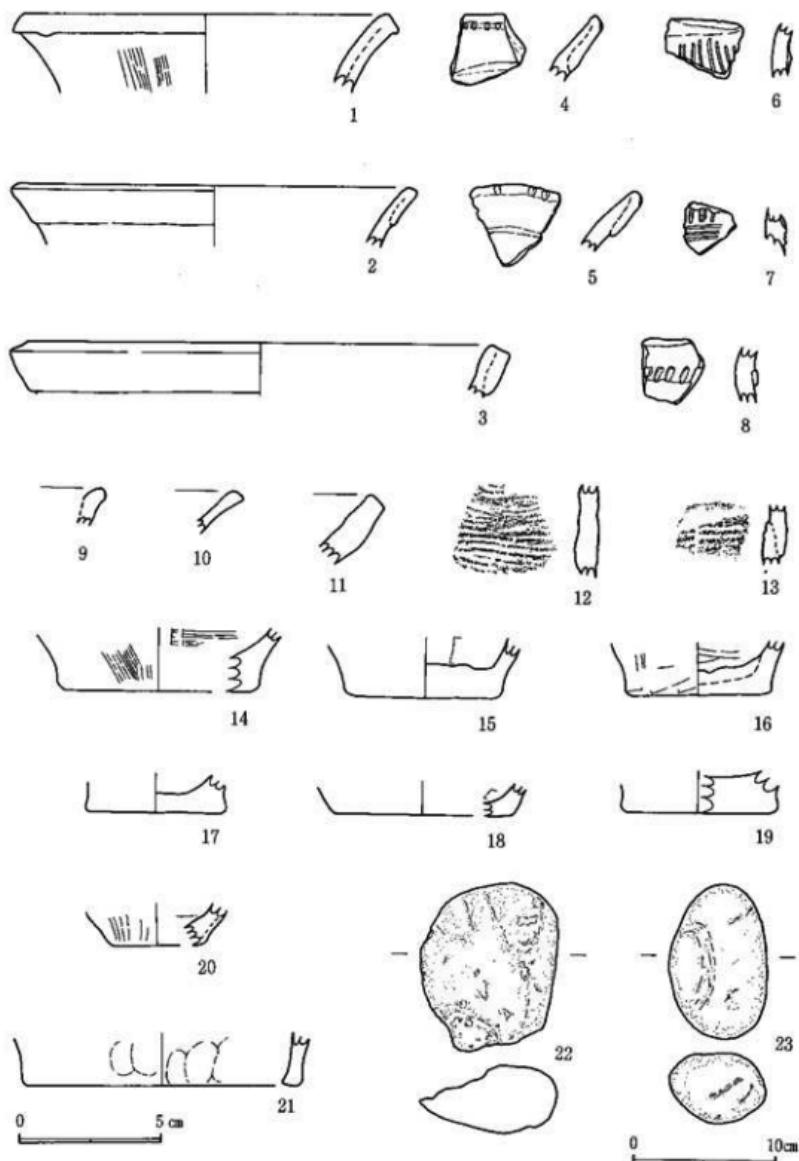
14から20は底部である。全て平底である。14は底径6.7cmを測る。内外面はハケ調整である。胎土は精良で色調は内外面共に褐色を呈する。15は底径5.5cmを測り、内面に僅かにヘラケズリが観察できる。また胎土は径3~4mmの砂粒を少量含む。色調は内外面共に黄褐色を呈する。16は底径5cmを測り、内外面共にハケ調整である。胎土は砂粒を微量含み、外面の色調は赤褐色、内面は橙黄色を呈する。17は底径4.8cmを測り、調整はナデのみで胎土に砂粒を微量含む。色調は内外面共に暗赤褐色を呈する。18は比較的器肉が薄いもので、6.3cmを測る。内面に僅かにヘラケズリ痕が見られる。胎土は精良で色調は内外面共に褐色を呈する。19は器肉がやや厚く、底径5.4cmを測る。胎土は精良で色調は内外面共に褐色を呈する。20は底径3.2cmのやや小振りなもので、器肉は薄い。外面にハケ調整が認められる。胎土は精良で色調は内外面共に暗褐色を呈している。

21は瓶である。底径9.8cmを測り、内外面共に指頭圧痕が認められる。胎土は精良で色調は内外面共に橙褐色を呈する。

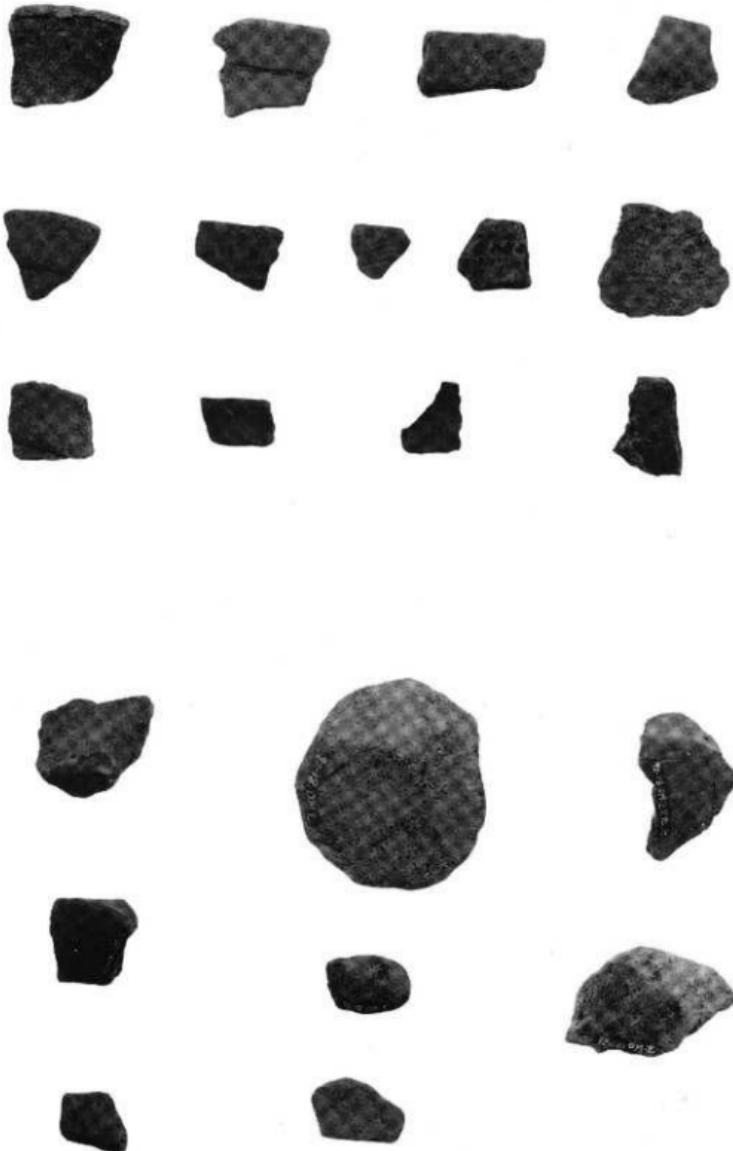
第10図22・23は共に磨石である。22は亜角礫で、擦痕等は明確に認められないものの、側辺に僅かに認められ、裏面は敲打欠損する。石質は砂岩である。23は亜円礫で先端部に僅かに擦痕が認められる。石質は硬砂岩である。

## 5.まとめ

ムクリ山遺跡の今回の調査で出土した遺物は弥生土器と磨石2点、それに黒曜石の細片が僅かばかり出土している。昭和48年度の調査と同様の内容を示すものであり、今回の調査でも防禦的高地性集落の特徴である鐵鎌・大型石鎌等の所謂武器類は出土していない。出土土器は弥生中期末に含まれるもので大半が占められ細片となって出土しているものの、個体数としては比較的多い。また遺物の移動を考えたとしても遺物の出土範囲は広く、尾根筋の径40~50mに遺物が散布しているような状況であった。遺構としては昭和48年度の平地式住居跡としたものが唯一であるが、今回の調査では遺構は検出できなかった。考えられる理由としては、瘦尾根であるため、堆積土壤が殆ど認



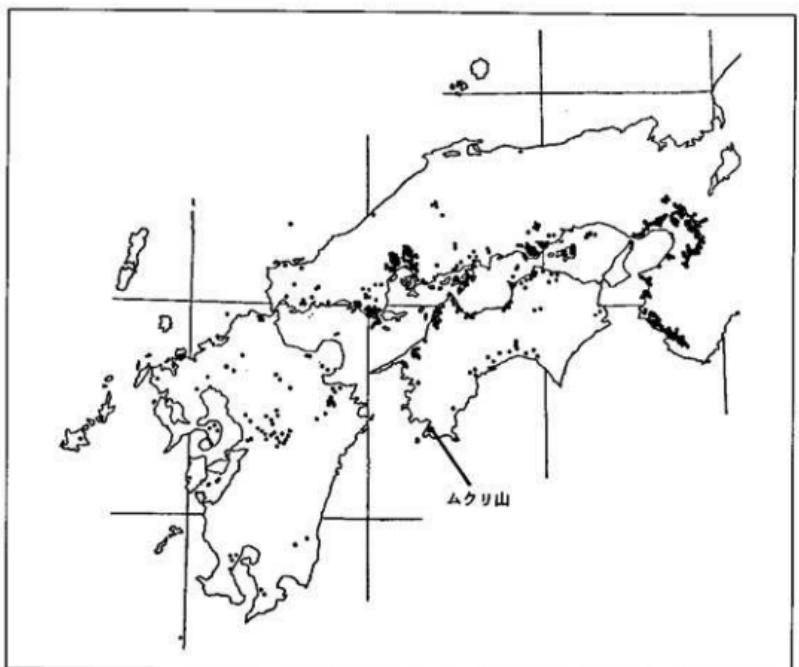
第10図 遺物実測図



出土遺物

められず、表土下はすぐ基盤層となるため遺構の残存状況が非常に劣悪と考えられる。また高地性集落という遺跡のため、集落自体が大きく展開することなく遺構自体が元来少なかったことに起因することも考えられる。後考えられることは、今回の調査では東側斜面部を調査対象地としたものの、集落の展開は西側傾斜部分の可能性も考えておかなければならない。

集落の在り方として、ムクリ山遺跡が防禦的集落の性格を有する遺跡かの問題である。ムクリ山遺跡では弥生時代以外に縄文時代早期から前期に該当する遺物の出土が知られている。また高知県西部でムクリ山遺跡以外に高地性集落として土佐清水市の唐人駄場遺跡を挙げることができる。唐人駄場遺跡は発掘調査が行われておらず弥生系高地性集落のその実態は把握されていないものの、やはり縄文時代の石器等の遺物が多量に採集されており、高位の立地条件を有する縄文集落がムクリ山遺跡と同様に弥生系高地性集落と重複する現象が認められている。高知県西部に見られる弥生系高地性集落を考えた場合、縄文時代集落と同じ立地条件を有することを偶然とするには若干の疑問が残る。高知県西部の高地性集落を考えた場合、瀬戸内地方の防禦的集落とは違い、生業的な集落の可能性も残されていることを考慮しておかなければならない。



第11図 高地性集落の分布（小野 1974より転載）

◇高知県大月町埋蔵文化財調査報告書第2集

## 竜ヶ迫遺跡・ムクリ山遺跡

◇発行日 1994年3月3日

◇編集・発行 大月町教育委員会

高知県大月町弘見2230

☎ 0880-73-1111

◇印 刷 有限会社 宿毛印刷

\* 表紙写真はムクリ山から竜ヶ迫遺跡を望む